須崎総合高校カヌー部の挑戦

～ 地域活性化を目指して ～

高知県立須崎総合高等学校

長　井　海　斗

１．はじめに

本校は、高知県のほぼ中央部に位置し、普通科と工業科、定時制課程があり、全校生徒462名の学校である。平成31年度に須崎高等学校と須崎工業高等学校が統合し、両校の専門性と良き伝統を持ち寄って生まれた新たな学校では、「人を思い 人とつながり 人に役立つ」人材の育成を目指すという教育目標のもと、知・徳・体の調和がとれた生徒の育成に取り組んでいる。

運動部活動については、カヌー部が令和元年度にインターハイと国体に出場している。しかし、学校全体でみると運動部活動への加入率が低く、部員数不足で悩んでいる部活動が多い。平成29年度に私が前任校である須崎高校に赴任した時には、カヌー部は部員が０名で廃部寸前だったが、統合後の現在は男子２名、女子１名である。本研究では「地域活性化」について須崎総合高校カヌー部の挑戦を発表する。

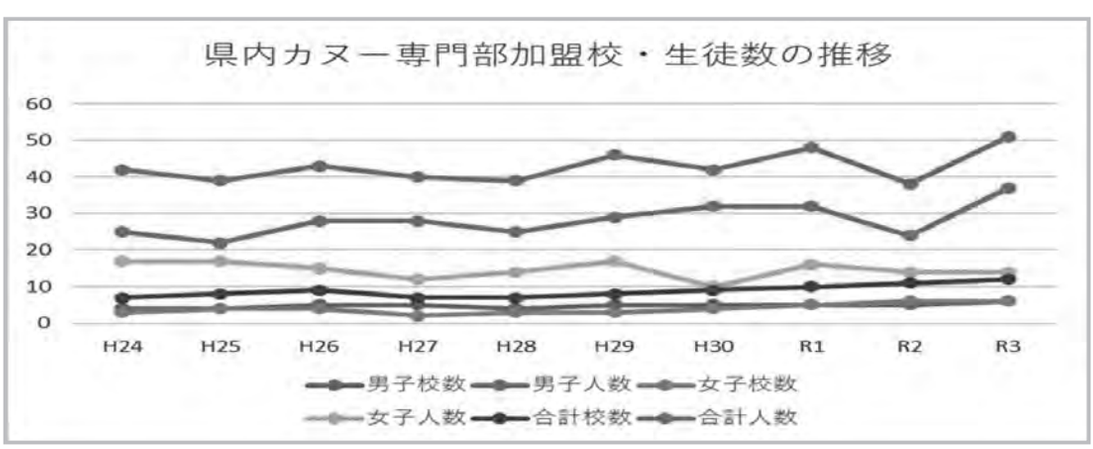
２．目的

須崎総合高校カヌー部が目指すのは、より良い競技成績を出すことと共に、カヌーの普及やカヌーを通して地域を活性化させることである。高知県内においては、カヌー競技自体がマイナー競技であるため、中学校にカヌー部がない状況であり、県高体連カヌー専門部加盟校数も６校のみである。

高校３年間競技に取り組んでも、卒業後大学へ進学しカヌーを続ける選手はほとんどいないのが現状である。少子化の中で選手確保・育成を進めるためには、新たな取り組みを起こさない限り、現状を打破することはできない。そのためにもクラブチームを立ち上げ、中学生以下カテゴリーの活動の場や、高校卒業後も県内で競技を続けることのできる環境を整える必要があると考えた。

また、須崎総合高校の練習場所である須崎市浦ノ内湾カヌー競技場は、海であるにもかかわらず、地形的に深い湾奥に位置し、波がほとんど立たず好条件の練習環境である。県外の高校生や大学生へ合宿誘致、インターハイなどの大会を開催することができれば、県外からたくさんの人が高知県に訪れ地域活性化になると考えている。

［県内におけるカヌー専門部加盟校および加盟生徒数の状況］



３．カヌーの種類

カヌーとボートの違いを知っているだろうか。カヌーとボートは似ているが、カヌーは漕ぎ手から見て前向きに進み、ボートは後ろ向きに進む。またボートでは、漕ぐ道具のオールが艇に固定されているが、カヌーのパドルは固定されていない。

（１）スラローム

リオデジャネイロオリンピックで羽根田選手が銅メダルを獲得し話題となった種目。流れのある上流からもしくは逆に下流から吊るされたゲートを通過する技術とスタート地点からゴールまでにかかった時間の両方を競う。

（２）ワイルドウォーター

激流をくだりタイムを競う種目。障害物となる岩や流れを読む力が求められる。距離は300m～600m。

（３）カヌーポロ

１チーム８名で構成され、コートに入りプレーするのは５名。途中交代は自由にできる。ボールを持っているプレイヤーの体を押すことができるなど、非常にエキサイティングなスポーツ。１人乗りのカヌーに乗って水上で行うハンドボールとバスケットボールを融合したようなスポーツ。ボールは水球で使用されているものと同様のものを用いている。

（４）ドラゴンカヌー

10人から20人の漕ぎ手と１人のかじ取り、それに１人の太鼓をたたくドラマーが乗り競争する競技。

※須崎市が主催する須崎総合高校の地

（５）スプリント

静水面を一定の距離とレーンを決めて複数の艇が一斉にスタートして最短時間で漕ぎ着順を競う競技。陸上の100mや競泳をイメージしてもらえれば分かりやすい。レースで漕ぐ距離は、1000m、500m、200m。その他にも5000mやリレーなどもある。200mカヤックフォア（４人乗り）の世界記録が約29秒。最高速度は約30km。スプリントにもスラロームにも、カヤックとカナディアンの２部門がある。大きな違いは使うパドル。カヤックは、両端にブレード（水かき）のついたパドルを使う。カナディアンは、片方だけにブレードのついたパドルを使う。

４．取り組み

（１）高知県の教員になるまでの経緯

	概　　要
2005年　高校入学	兄と姉の影響を受け楊志館高校にてカヌー競技を始める
2006年　高校２年	カヌー競技スプリントにてインターハイ優勝
2007年　高校３年	ジュニア日本代表となり世界ジュニア選手権やアジア選手権に出場
2009年　大学１年	大正大学へ進学
2012年　大学４年	日本代表となる
2013年　就職	オリンピックを目指し企業に就職して競技を続ける
2014年	世界選手権やワールドカップに出場。アジア大会に出場し４位入賞
2015年　12月	東京オリンピックでの男子カナディアンシングル200m種目が無くなることが決まり引退
2017年　１月	約１年間カヌー競技から離れたが日本代表時代のコーチより高知県で教員採用試験の特別選考があるという話を聞き高知県に行くことを迷わず決めた

（２）高知県立須崎高等学校に赴任

平成29年４月に須崎高校に赴任することとなり、カヌー部の顧問を任された。しかし、カヌー部は部員が０名であり、部としては名前が残っているだけだった。高知県に教員として就いたが、カヌー競技に取り組むことが出来ないのではないかという不安からのスタートであった。昨年度までカヌー部の顧問だった先生方よりこれまでの経緯を聞き、活動再開に向けて相談し、ひとまず部員勧誘に取り組んだ。その結果、１名の生徒が入部し、その後徐々に部員を増やし、現在は３年生１名、１年生２名、合計３名で活動している。

（３）他校や須崎市との連携

県高体連カヌー専門部加盟校は６校のみであり、各校の部員も少なく県内全体で50名程しかいないので、学校の枠を越えて練習をしている。特に須崎総合高校は高知海洋高校と明徳義塾高校と練習場所を共有しているので、合同練習の形態をとることが多い。各校指導者で協力し合い、種目や競技力に応じてグループ分けを行うことで、個に応じた効率の良い練習ができている。

ハード面では、須崎市の大きなバックアップを受け新しい艇庫とトレーニング場の整備について協議し、実現した。当時、東京オリンピックの合宿誘致も計画しており、ナショナルチームに対応した施設設備の整備を行う必要があった。そのため、トレーニング場には鏡を多く置きフォームチェックが出来るようにし、トレーニング器具も高重量を扱えるものを揃えた。今後は、国内の高校生や大学生などの合宿誘致も計画している。また、カヌー競技は試合や合宿において艇を運搬する必要がある。運搬費用が大きな経済的問題となり、県外で合宿する上で大きなハードルとなっていることから、須崎市と協議し、試合や合宿が誘致しやすいよう、レンタル艇を購入し施設に設置した。

［須崎市の協力を得て整備された施設・器具］

艇　庫

鏡

高重量のウエイト器具

レンタル艇

練習や競技会を行う浦ノ内湾

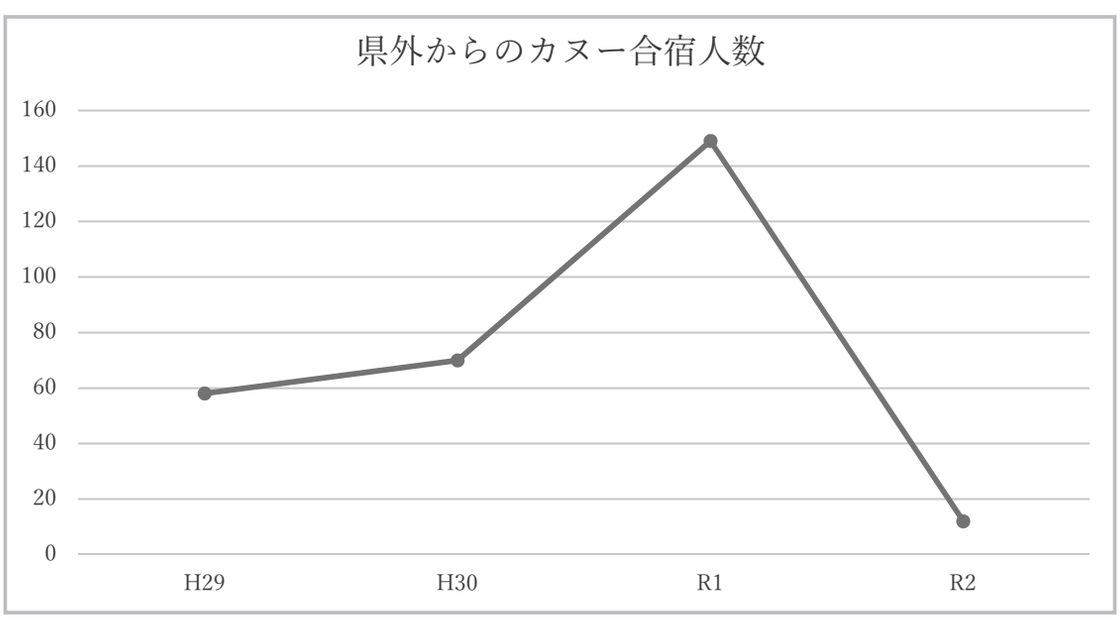
（４）カヌー体験の実施

須崎市と連携をして毎年カヌー体験を実施している。小学生から大人まで幅広い年代を対象として行い、メインの指導は教員が行い高校生は導入運動や基本的な技術指導を行った。また、小学生と一緒の艇に乗り、勢いのある進みを体感させたり、岸から遠く普段は行くことのできない無人島まで漕ぐなど、カヌーの魅力をたくさん伝えることができた。

高校生は、体験を通じて最初は全然乗れなかった人も短い練習の時間で上達しているのを見て、カヌーの楽しさを知って興味を持ってくれる人が増えればいいと思った。多くの人にカヌーの楽しさを伝えるとともに、技術指導することや幅広い年代の方々と接することで、教える中で自分の技術と照らし合わせて改善点を見つけることができ、学習する良い機会となり、生徒自身の競技力向上にもつながっていると考える。また、初心を思い出せ、さまざまな年代の方たちと話すことができ社会勉強にもつながっていると考える。

（５）チェコナショナルチームや日本体育大学が合宿

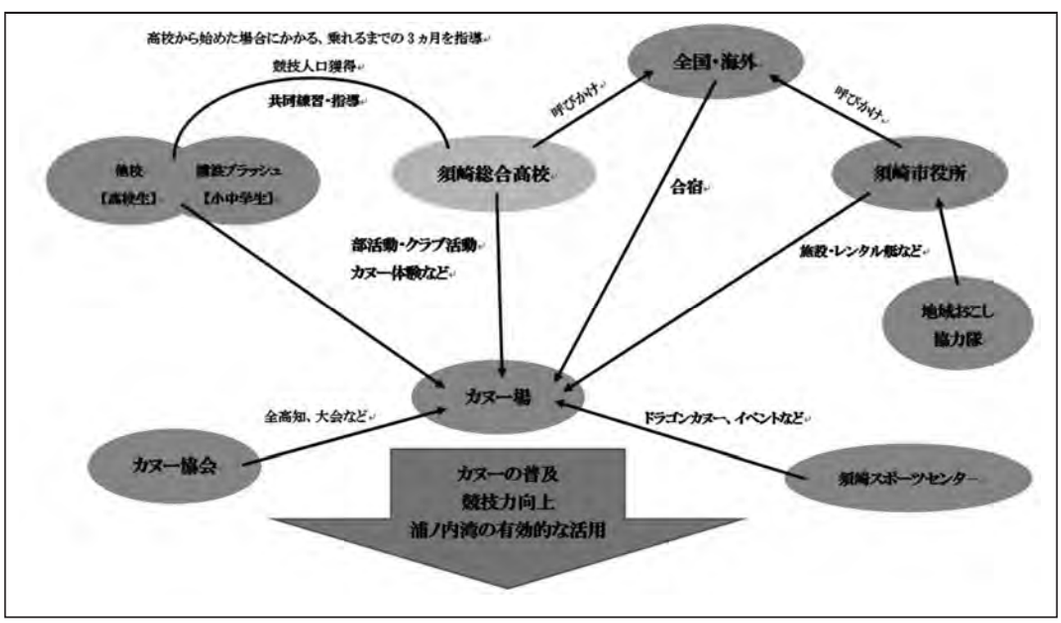
平成29年度にはチェコのカヌーナショナルチームによる合宿や、日本体育大学を含む県外のカヌー競技者約60名の合同強化合宿が行われた。平成30年度にはチェコ、ロシア、ベルギーのカヌーナショナルチームによる合宿や、日本体育大学を含むカヌー競技者約50名の合同強化合宿が行われた。そのほかにも県外からたくさんの競技者が合宿に来てくれた。31年３月にはハンガリーのジュニアナショナルチームとの交流も行うなど地域での盛り上がりを見せると共に、環境についても高い評価をいただいている。令和１年12月には全国高体連カヌー専門部と連携をとり全国・四国の有望者を集めた合宿を開催することができた。また、令和２年11月から12月まで日本代表チームが合宿を行ってくれた。令和２年11月には地域の方々から競技者までの対象としたカヌーイベントを開催し、多くの方々にカヌーを楽しんでもらえた。令和３年３月には四国・中国・九州地方の高校生約150名が集まりレース形式の合宿が開催できた。令和３年７月には東京オリンピックチェコナショナルチームが約１か月間事前合宿を行った。これまでの取り組みを新聞やテレビなどに取り上げていただき、合宿を通して須崎市の活性化につながっていると思う。



※Ｒ２年は110名利用予定だったが新型コロナウイルス感染症の影響で
98名分のキャンセルが入った。

（6）クラブチームの立ち上げ

高知県の中学校にはカヌー部が無く、小中学生を対象にしたクラブチームは高知市に１つあるだけだった。須崎市には浦ノ内湾というとても素晴らしい環境があるので、地域のカヌークラブを立ち上げ須崎市周辺の小学生から高校生、一般の人まで誰でもカヌーを行える環境を整備して、地域でカヌーを盛り上げる体制を整えたいと考え、平成30年４月に須崎市のクラブチーム『横浪ブラッシュ』を立ち上げた。このチームには須崎総合高校のカヌー部が全員所属しており、現在では小学生が５人、中学生が２人、一般の方が３人、指導者が５人で人数も少しずつではあるが増えてきている。クラブチームの練習日には学校や世代に関係なく一緒に練習することで、子どもから大人まで世代を超えた交流が行える。また、中学校にカヌー部がないため新入部員にカヌー経験者はおらず、最初はカヌーに乗る練習から始める必要がある。カヌーに乗れるようになるまでには約３カ月かかり、その期間２年生、３年生を十分に指導できない。クラブチームを活用することにより複数で指導することができレベルに合わせた練習が可能となり、効率的に競技力を向上させられる。また、最近では学校の働き方改革として部活動が問題視されているが、クラブチームには複数の指導者がいるので、休日に教師が部活動の指導に携わる必要がなくなり、教員の負担も軽減できると考えている。



５．まとめ

地域活性化を目指して取り組んでいるが、まだまだ課題がたくさんある。１つ目は高校生の競技人口拡大である。少子化で子供がどんどん減っていく中、競技人口を確保するための対策を考えていかなければならない。２つ目は中学校以下の競技者の確保である。クラブチームを立ち上げ小学生の競技者は少しずつ増えてきたものの、中学校に部活動が無いので中学校から高校へと繋がることが難しい。指導者の育成も課題となる。３つ目はカヌー競技者以外の一般の方々に浦ノ内湾をアピールする必要がある。素晴らしい環境であり、海外や国内からたくさん合宿に来ていただいているが、合宿では一般の方々へカヌー競技のアピールにならない。また、その期間のみしか経済効果がない。これから考えていかなければならないことは、地域の方々に興味を持ってもらえるように、チェコカヌーチームや日本代表チームの練習観戦ツアーやイベントなど巡航船を活用して行うことや、海上アスレチックやシーカヤック体験などのお手伝いを地元の高校生などにお願いをして、もっと地域との関わりをもって応援してもらえるようにしていく必要がある。

これからも合宿の誘致やカヌー体験を行い、カヌーと言ったら『須崎』と言ってもらえるように努力したい。そのためにも高校生がインターハイや国民体育大会、国際大会で活躍できるように須崎市やクラブチームと連携をしていきたい。そしていずれは須崎市でインターハイや全国中学生大会などの全国規模の大会や、須崎でしかできないようなオリジナルのイベントを考え開催できるようにこれからも協力していきたい。

環境を整備してくださった、高知県、須崎市には本当に感謝しています。良い結果を出して恩返しをしたいです。